産業教育調査実習
2012/06/08

近江学園を見学して

教育学部３年　02100050
伊藤　実貴

１．　はじめに

今回私たちが見学した「近江学園」をはじめ、滋賀県は国が障害者福祉に関する一連の法制度建設以前から先駆県として有名であった。滋賀県における障害者福祉の始まりは近江学園建設者である、糸賀一雄先生、田村一二先生、池田太郎先生の三人を抜きにしては語れない。彼らは近江学園の他にも信楽青年寮や第一・第二琵琶湖学園などを建設し、その土台を築いていった。以下では、見学内容を含め彼らのスタートとなった近江学園について報告していきたいと思う。

２．　糸賀一雄の思い

学園創設者の糸賀一雄はこの学園のいたるところに、彼の障がい者教育への思いを散りばめている。ここでは彼の考えの一部を紹介したいと思う。

●愛と共感の社会の実現

彼が目標としたのは、「人間と人間が助け合い、受け入れあう、理解と愛情で結ばれる社会、すなわち共感の考え方に支えられた社会」を実現することである。

●無財の七施

①眼施・・・人にやさしいまなざしを持って接すること
②和顔悦色施・・・にこやかなほほえみをたたえた顔で接すること
③言辞施・・・言葉の美しさ、やさしい声で接すること
④身施・・・勤労奉仕のこと
⑤心施・・・感謝の心
⑥牀座施・・・席をゆずってあげること
⑦房舎施・・・一宿一飯の施しということ

設立当時から現在まで学園職員の方々は、この「無財の七施」、つまり無償の愛をもって児童たちと接している。

●糸賀が求める職員の三条件

①四六時中勤務・・・心の休まる暇もない非常に困難な教育実践の場。
②耐久生活・・・経済的に報われることのない、むしろマイナスになるかもしれない
③不断の研究・・・研究は持続的・積極的にしていかなければならない。

現在の学園においても、職員寮を学園内に併設し四六時中勤務に努めている。また、不断の研究のため研究室を設置し、より良い支援の形を日々考えている。②にある耐久生活で

は、寄付に頼らず独立・自活を目指す。

３． 理念

「この子らを世の光に」

創設者である糸賀先生ら３人が掲げていた理念であり、障がい者に対して、あわれみによる補助や政策を与えるのではなく、彼ら自身が純粋に輝く素材であるのだから、それを磨き伸ばす支援を、という意味である。

「補助」ではなく「支援」を、という考え方は前日に尋ねた信楽青年寮の方もおっしゃっていたことで、障がい者の人たちに同情し彼らにできないことを補助していくことよりも、彼らのやりたいこと、考えに沿って支援をしようという姿勢は印象的であった。

４． 学園の組織

◇近江学園の組織編成は、生活支援・日中支援・間接的支援の３つに役割分担されている。

●生活支援

この部署では在籍児童の日常生活をサポートしている。児童と言ってもここに通う生徒の年齢層は幅広く、下は６歳から上は３０歳以上の方が在籍しているようで、年齢や性別、障害の重さによって生活１班から５班までに分かれて暮らしている。班ごとに違う棟で生活し、各班に担当教員がついている。内訳は以下の通りである。

・生活 1 班・・・小学生以下の男子中心（18 人）
・生活 2 班・・・比較的障がいの重い人たち中心（18 人）
・生活 3 班・・・約 3 年で就労を目指す中高生中心（22 人）
・生活 4 班・・・中高生で比較的障がいの重い人たち中心（18 人）
・生活 5 班・・・年齢に関わらず女子を支援（24 人）

●日中支援

近江学園では、学齢期の児童は朝職員と共に近くの学校に登校していくため、日中はそれ以外の児童を対象とした支援を行っている。

- 幼児保育室：就学前児童を対象に療育や交流保育などの支援
- 軽作業科： 障がいが重い人を対象に個々に応じた支援プログラムを組む
- 木工科・窯業科：両科の特性を生かした社会的な自立への支援提供

●間接的支援

医局や炊事、庶務に加え、入園など学園の入り口的役割を担っている地域支援室、より良いケアを考えていく研究室、進路相談やアフターケアなどを行う自立支援室が設置されている。

４．施設見学

まず近江学園に到着した私たちは体育館で園長さんの話を聞かせていただき、その後、施設内の見学をさせていただいた。６万８千平米の土地にある近江学園はやはり広かった。

施設全体を一通り見学させていただいたが、紹介しきれないのでとくに私の印象に残っているものをいくつか紹介したいと思う。

左の写真は生活１班の遊戯スペースである。この写真では窓もカーテンも開けられているが、児童が使用するときは、全部閉ざし、児童の気に障らないように外部からの余計な介入は遮断するそうだ。窓も割れないものを使っているそうだが、時に児童は思いがけない力を発揮し、割れてしまうこともあるそうだ。（このとき「毎日動物園にいるようなもんですよ」と楽しそうに笑った職員の方が印象的だった）

次に見せてもらったのは窯業科の作業場である。在籍中の児童の作品だけでなく、過去に在籍していた児童の作品も多く保管されていた。作品は展示会などで発表されることもあるが、基本的に商品としては売り出していないそうだ。どの作品も、細かいところまできちんと表現されており、その技術の高さに非常に驚かされた。いくつもの作品を見ていると、やはり個性があるようで、「この作品とあっちにある作品、同じ人が作ったのかな？」と思えるものもあった。園長さんの話にもあったが、知的障害者は「土」作りで力を発揮することが多いということを、作品から湧き出る発想のユニークさと技術の高さをもって実際に肌で感じとることできた。

次に紹介したいのは木工科の作業場である。木工科の作業場は比較的新

しくきれいであった。窯業科と同じく児童の作品が保管してあったが、こちらも高い技術がうかがえた。作業をしているところを見ることはできなかったが、作品から推測できるだけでもその作業は緻密なものだろうと思えた。

ここでは紹介しきれなかったが、他にも職員寮や給食室なども見せてもらい、そこから学園の実際の支援を感じ取ることができた。残念だったのは、畑や飼育舎など施設はあっても、教員不足のために運営できていない箇所がいくつか存在したことである。しかし、それらが実用化される日が来れば、今よりも良い支援の形が生まれてくるかもしれないと未来の支援への可能性も感じた。

５．　これから

現在の学園が抱える問題をいくつか考えたいと思う。まずは先にも少し言及したが、教員・職員の不足である。人材が不足しているからこそ支援の幅を拡大していくことが困難な現実がある。たとえば女子に対する支援は生活 5 班に集約されている。もうひとつ班を増やしたくても増やせないのである。次に在籍児童の年齢層が広がっていることが挙げられる。児童と呼べる年齢ではない方も在籍していて、このことについて支援の範囲をどうしていけばいいか、これから考えていかなければならない。そもそも、そういった状況になってしまっているのは学園以外に受け皿がないことが予測される。学園という施設がただひとつの支援の形なのではなく、地域と連携しつつ、学園は地域の中で数ある支援の選択肢の中のひとつになるべきなのだろう。

６．　感想

近江学園を中心に滋賀県では、障がい者に対する取り組みの基盤がしっかりしていること、そしてその取り組みがやはり今でも日本をリードするものであることを再確認した。

園長さんが「滋賀県は福祉先駆県だった」と過去形を使ったのが印象的であった。私からすれば前述したように、以前ほど発展的ではないがそれでも他県に比べれば進んでいるのではないかと思うが、彼らはそれで満足するのではなく、より進歩ある福祉を持続的に目指しているのだと感心させられた。